令和5年度　学校経営計画・学校評価シート

高知県立高知江の口特別支援学校

《高知県の教育の基本理念》	（1）学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち （2）郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	目指すべき姿	学校像	（1）基礎学力の向上 ①学習意欲を高め、自主学習の態度・技能を身に付けることができるようにする ②個に応じた指導方法を充実させ、児童生徒一人ひとりの特性、能力に応じた基礎学力の定着を図る （2）調和のとれた全人的発達 ①困難を克服する強固な意志を育て、明朗で豊かな心情を培う ②生活経験を豊かにするとともに、社会適応能力を養う （3）健康の回復・改善 ①健康の回復・改善に対する意欲と健康づくりの意識の向上を図り、自己管理能力を高める ②健康の回復・改善に必要な知識・技能を修得できるようにするとともに、情緒の安定を図る	目指すべき姿の実現に向けた取組の概要	○授業評価と学習評価による授業改善 学習指導要領、児童生徒の実態、学習評価を踏まえた 授業力の向上。 ○よりよく生きる力を育む教育課程改善。 よりよく生きる力を育むことができる特色ある教育活動づくり。 ○自立活動の指導の充実。 教科等の学習上の困難を改善し支える自立活動の指導の充実。 ○子どもたちのことや授業づくりにやりがいをもち、協働的、合理的に取り組む職場づくり。 子どもたちのことや授業づくりにやりがいをもち、協働的、合理的に取り組む職場づくり。
《取組の方向性》	《6つの基本方針》 ①チーム学校の推進 ②厳しい環境にある子どもへの支援や子どもの多様性に応じた教育の充実 ③デジタル社会に向けた教育の推進 ④地域との連携・協働 ⑤就学前教育の充実 ⑥生涯学び続ける環境づくりと安全・安心な教育基盤の確保 《6つの基本方針に関わる横断的な取組》 ①不登校への相応的な対応　②学校における働き方改革の推進		児童生徒像	【知】 自分に適した学び方を使って主体的に学び、社会の中で豊に生きる児童生徒 【徳】 多様性を尊重し、他者と助け合いながらよりよく生きる児童生徒 【体】 自分の心と身体に適した生活を調整することで、心身ともに健康な生活を送る児童生徒		

《重点取組項目》

（評価　A:目標を十分に達成　B:ほぼ目標を達成　C:やや不十分　D:改善を要する）

項目	取組のねらい［P］	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容［D］	中間評価［C］	中間評価後の取組内容[P-D]	年度末評価［C］		学校関係者評価		見直しのポイント［A］
授業評価と学習評価による授業改善 専門性の向上	学習指導要領、児童生徒の実態、学習評価を踏まえた授業力の向上。	【現状】 △病状や学習空白などの児童生徒の多様な実態に応じた教科等の指導力の不足。 △「学習評価」についての個々の教員の理解と組織的な検討の不足。 ○授業でのICT活用が活発。（遠隔、デジタル教科書・ドリル、Classroom、ドローンなど） ○年１回の公開授業はおおむね全員が取り組めた。 【目標】 **★児童生徒の個々の実態に応じた教科等の指導力を高め、児童生徒がわかるできる学びたくなる授業を行う。** 【評価指標】 ・わかるできる学びたくなる授業づくりができると自己評価する教員数が増加（学校評価アンケート） ・児童生徒による授業評価の向上（年間を通して授業評価を実施） ・教員のICT活用率100％ ・新たなICT活用にチャレンジする教員が50%以上（学校評価アンケート） ・1教科以上で実態別学習形態の実践と全教科等での検討	・研究部は、授業者の授業改善を支援する授業研究体制を構築する。 ・研究部は、学習指導要領、学習評価に関する計画的な研修をすすめる。 ・各教科等担当者は教科等会で年間指導計画、指導方法、評価の在り方を検討する。 ・各教科等担当者は、実態別学習形態、手立てによる、わかるできる学びたくなる授業づくりを検討する。 ・教務部は教科等会での検討内容と年間のスケジュールを示し、教科等会のシステム化を進める。 ・DX推進部は、全ての教員がICTを効果的に活用できるため、また児童生徒の情報活用能力の育成とICTの利活用のための企画・運営を行う。 ・教務部は運営委員会、教科長会等で各教科等の取組状況を把握し推進する。	B	・教科別のグループ分けにより教科会を設け、協議・検討を6回実施（4/12,6/14・21,7/5・28,8/30,9/13）。 ・本年度から決めている研修の日は、主に、病弱教育、自立活動、進路、生徒指導、ICT活用などの研修に時間が割かれ、学習指導要領、学習評価に関する研修を実施する時間が取れなかった。 ・教科会において、年間指導計画の検討や児童生徒の実態に応じた手立て、多感覚を使った授業実践等について検討することができたが、教科会は実施回数や時間に限りがあり、また、それ以外の時間にも他の校務があるなど、各教科が主体的に検討の時間を設定することが難しく、協議が深まりづらい状況になっている。 ・年度当初に、教科会の在り方（行事予定表と連動した年間スケジュールや協議内容）を示し、学校全体の取組となるような仕組みを構築し、また、教科会の時間の使い方についても提示した。 ・学校行事や授業等へのリモート参加の支援やソフトウエア等の活用を促進するための研修会（2回）を実施し、1人1台端末の活用を促進した。 ・1学期の教科会での取組について、アンケートを行い（7月）、取組状況を把握し、運営委員会（9月）に報告した。	・引き続き、教科会を月１回実施するとともに、2学期に予定している公開授業・研究協議に向けて協議を行う。 ・講師を招聘して学習指導要領及び学習評価などに関する研修会を企画するとともに、教科会で学習指導要領と指導案の関連性などに留意した協議がより促進されるよう働きかけ、教員が相互に学び合う機会を創出する。 ・実施状況調査をもとに、教務部、研究部、カリマネ委員会等で、次前度に向けて、教科会の日数や協議内容などについて検討する。 ・教科会で扱う内容が広範囲に渡るため、十分に協議・検討する時間が確保できない傾向にあるため、協議項目の精査（優先順位など）を示す必要がある。 ・情報モラルに関する事柄を授業に取り入れることができるための研修等を実施するなど、教員のICT利活用能力の向上を図る。 ・１１月及び2月にアンケートを行い、次年度に向けて協議内容を充実させるための取組を検討する。	B	・定期的に授業改善、教育課程の改善・充実などを協議する教科会を設けた。 （4/12,6/14・21,7/5・28,8/30,9/13,10/25,11/8,12/6,1/17,2/14,3/6） ・各教科１名が公開授業（2学期）を行い、事後に研究協議を実施した。全教員が2回以上参観するよう計画したことで、教科を横断した学びの機会を得ることができた。 ・公開授業の研究協議や全体研修（12/25）を実施し、学習指導要領に関する研修の機会を設けた。 **・「学習指導要領に基づいた指導と評価（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：83％（25/30）** **・「学校は、研修の機会を十分に持てている（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：92％（35/38）** **・「授業改善の手段として公開授業が効果的だった（授業改善のための教員アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：84％（15/18）** **・「公開授業後の研究協議では効果的な学ば せ方について十分検討できた（授業改善のための教員アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：91％（16/18）** ・各教科会で、年間指導計画の検討や児童生徒の実態に応じた指導方法（指導案の検討）、評価方法等について協議することができた。 **・英語科が実態別学習形態を実践** ・多感覚を使った学習方法を含め、わかるできるまなびたくなる授業づくりについて、各教科会で協議する機会ができた。 **・「前年度と比較して「わかるできる学びたくなる」授業づくりができているか（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：86％（26/30）** **・「教科会で「わかるできる学びたくなる授業づくり」のための手立て（多感覚を使った体験活動含）について十分検討できた（授業改善のための教員アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：84％（15/18）** ・教科会の在り方を示すことでシステム化を図ることができた。 **・「教科会は教科の専門性を向上させる うえで有効（授業改善のための教員アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：83％（15/18）** ・ICTに関する研修の実施や参加の呼びかけ、デジタル教材の活用周知、リモート授業等への支援等を行い、ICTの効果的な活用を促した。 ・ロボットプログラミング大会（全病連主催）に、生徒（高等部）が参加する機会を設け情報活用能力の育成を図った。 **・「ICT機器の効果的活用（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：100％（30/30）** **・「ICT機器を効果的に使った新たな取組へのチャレンジ（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：93％（28/30）** **・「ICT機器などを活用したわかりやすい授業」に肯定的な回答をした生徒：中学生7/7，高校生9/9）**	A	・学校評価アンケートにおける教職員へのアンケート結果からは、授業改善についての肯定的な評価が多く、学校の取組が充実していることが理解できる。 ・授業改善の取組において、学校評価アンケートでは、教員の7～8割が肯定的な評価をしているが、児童生徒にとってどのように届いているのかデータがほしいところ。肯定的な評価が教員側の自信になるのはいいが、通信になったらいけない。定量的な評価とともに、定性的な評価も見とれる工夫があるといい。 ・授業評価については、例えば、子どもとのやり取りで「今日の自分の授業は主体性を引き出すアプローチが不足している」とか「話ばかりをし過ぎた」など、教師側に、評価を見とるためのスキルが求められる。それらのスキル を個々の教員に求めるのはハードルが高く、教科会やクラス会などのチームで高め合える仕組み（システム）が必要。 ・ロボットプログラミング大会（全病連主催）に、高等部生徒が授業でプログラミングを学習し、予選会（中四国大会）に参加した取組については、生徒からすれば、面白そうなことには自分から学びたくなるし、競技的なスタイルが面白く評価できる。また、生徒数が少ない学校ゆえに、じっくりと取組むことができるのも江の口ならではの特徴。来年度は、中四国大会の主催校になるので、生徒にとっては励みになると思う。	A	・授業改善につなげるための公開授業、校内研修、教科会の在り方について検討し、R6年度の取組に反映する。 ・児童生徒の認知特性に応じた指導方法を効果的に協議することができるフレームワークを構築するための検討を行う。 ・外部との連携によって教科の専門性を高めるための取組を検討する。 ・多感覚を使った体験的な学習についての理解を深める研修を行う。
キャリア教育の充実 キャリアマネジメントを含むカリキュラムマネジメント	よりよく生きる力を育むことができる特色ある教育活動づくり。	【現状】 △児童生徒の実態に合わせた教育課程の継続的な検討が必要。 △児童生徒数が少なく、集団での学びや関わり合いの機会が少ない。 △社会性を学ぶ経験が少ない児童生徒が多い。 △総合、特活、SSTの取組が弱い。 ○教員がチーム力を発揮できる組織構成。（複数担任制、SC、SSW配置、コーディネーター配置） ○下学部・下学年対応など柔軟な教育課程編成が可能。 ○幅広い異年齢で学ぶことが増えつつある。 ○R4年度からカリマネプロジェクトチームを始動し、R5年度は委員会化。 【目標】 **★多感覚を使った体験活動を取り入れた学習によって学習効果を高め、主体性もって学ぶ総合的な学習（探究）の時間でキャリア実現や社会性を育成する。** 【評価指標】 ・多感覚を使った授業及び総合の時間への児童生徒の高授業評価と、学力の向上・定着度 ・キャリアパスポートの活用場面が前年度比で増加、内容の充実。	・全ての教科等で多感覚を使った体験活動を取り入れた学習を実践する。 ・各教科担当者は教科会で多感覚を使った授業について話し合い、共有、授業評価を進める。 ・各学部は総合、SST（高）の担当チームを組織し、取組を蓄積・充実させる。また総合担当チームは学校学部全体計画を作成して実践を進める。 ・文化・芸術・スポーツの分野で本物に触れる体験活動を行う。 ・各教科等担当者は、新しい時代を生きる力としてSDGsに関する題材を扱う。まんべんなく扱うより教科長会や学部会で共有、調整等の機会を持つ ・カリマネ委員会は、多感覚を使った体験活動を多く取り入れた学習と、総合的な学習（探究）の時間の取組をPDCAサイクルで推進する。	B	・すべての教科で、多感覚を使った授業実践を行い、教科会において授業実践の共有や評価、2学期以降の方向性などについて協議することができたが、検討の視点や質的な違いなど、教科により取組内容に差異がある。 ・チームで、総合及びSSTの授業に取り組むことができた。 ・全校総合は、全体計画に基づき、学習計画の立案、実践及び評価を行った。 ・海上でのシーカヤック体験（5月12日）を通じ、本物の自然に触れる活動を実施した。 ・砂浜清掃活動や、高知県の害獣被害の学習（出前授業や校外学習）を実施し、SDGsの視点を踏まえた活動を実施した。 ・カリマネ委員会（9月実施）において、多感覚を使った体験活動の実施状況及び総合的な学習の時間の取組について、報告（情報共有）・協議を行った。 ・教職員が、カリマネについての意義や全体像、日々の実践との関連性などを理解するための場の設定がないために、それに対する共通認識を持つに至っていない。	・教科会等で協議された児童生徒の認知特性等に応じたアプローチ方法などについて、公開授業で実践し研究協議で検討して、有効な手立てを教職員間で共有していく。 ・ウェルチェアラグビー（11月３日）、芸術鑑賞会（11月27日）を実施し、パラアスリートや演奏家などの本物に触れる体験活動を予定している。 ・各教科においてSDGsの内容を取り扱う単元を設け、各教科の年間指導計画に反映していく（令和6年度に向けて）。 ・カリキュラムマネジメントの全体像や取組、教育課程や授業実践との関係について、教職員の理解が更に深まるようWSなどで情報提供する。	A	・各教科会で多感覚を使った体験活動を取り入れた学習について協議し、授業実践を行った。 **・「多感覚を使った体験活動を取り入れた授業づくり（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：93％（28/30）** **・「多感覚を使った体験活動を取り入れた学習について、教科会で検討できた（授業改善のための教員アンケート）」に肯定的な回答をした教員の割合：86％（15/18）** ・総合、SSTともに、年間を通じてチームで実践することができた。特に、全校総合では、学部を超えた縦割の学習形態により、児童生徒の学びへの主体性や協働性、社会性の育成に効果的な取組ができた。 **・「総合的な学習（探求）の時間の学びの充実（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした児童生徒：児童1/2，中学生4/7，高校生9/9** ・高等部では、SSTと自立活動の取組内容との整理が不十分であり、ホームごとの実践では個別に近い内容となった。また、高等部総合は、目標と取組内容の差異や、全校総合の時間数との調整など、見直しが必要。 ・シーカヤック体験（5/12）、鈴師による講義（7/6）、ウィルチェアラグビー体験（11/3）やプロ演奏家による芸術鑑賞会（11/27,1/31）、釣りクラブ（2学期複数回）など、本物に触れる機会を設けた。児童生徒の主体的な言動や姿勢が見られた。 ・SDGsの視点を踏まえた学習では、遠足での海岸清掃（5/12）や江の口フェスティバルにおける児童生徒及び保護者等による愛校作業（球根植えや校外清掃）（11/3）などを実施した。 ・カリマネ委員会を定期的に実施した。（4/6,17,5/15,6/5,9/4,10/30,12/25,1/29,3/11） ・教員のカリマネについての知識・理解を更に促進するために研修会を開催した。（4/3,12/25） ・総合的な学習の時間について、学習評価、授業評価と共に児童生徒による評価を実施した。また、担当教員で学習評価と授業評価を行った。（7/31,8/30,9/4,14,12/14）	A	・総合的な学習（探究）の時間の取組では、自己理解や他者理解が深まった生徒がいたという点が評価できる。そのような児童生徒が少しずつ増えていくことは良いことだ思う。 ・総合的な学習（探究）の時間の取組が、体験的な活動と関連付けられている。また、小学部から高等部までの全校児童生徒が、縦割りで学ぶという学習形態も、とてもユニーク。発達段階が異なる子どもたちだが、一緒に学ぶ、児童生徒数が少人数だからこそできる取組と思う。年間を通じて、行事も沢山行われており、江の口の特色として打ち出せる取組になっている。 ・キャリア教育の取組が、音楽、食、社会参画など多岐にわたっており、生活が豊かになるような取組が沢山あることは評価できる。また、学校のホームページやすぐーるなどで情報発信されていることはとてもいい。 ・キャリア教育は、不登校対策とも重なる取組。「個別最適」と「協働的な学び」とのバランスが取れている（小規模校の強み）。 ・異年齢集団は、同年齢よりも関係性を作りやすくなるということも明らかになっており、総合的な学習（探究）の時間に縦割りの学習形態を取り入れているのは良い。江の口の強みになる。	・カリマネ委員会において、児童生徒の特性等を踏まえて本校のキャリア教育の捉え方を整理し、どのような在り方がより良い教育活動につながるか協議する。 ・キャリア教育や社会性の育成、人との関わりなどの視点を考慮して、総合的な学習（探求）の時間、自立活動などの内容を検討する。
自立活動の指導の充実 学校設定項目	教科等の学習上の困難やより よく生きる上での困難を改善し支える自立活動の指導の充実。	【現状】 △自立活動の流れ図に沿った指導ができておらず、目標設定があいまい。 △教員の自立活動の指導力不足 ○ほぼ全教員がCo-Mameについて研修し、一部が実践に取り組んでいる。 ○一斉授業の自立活動でコミュニケーション力向上につながっている。 【目標】 **★全児童生徒の個に応じた自立活動をチームによるPDCAサイクルで実践することで、指導が充実する。** 【評価指標】 ・自立活動の研修開催（年間10回以上）。 ・年度末に行う教員自己評価で自立活動の指導力向上に関する肯定的評価が増加する。（自己評価シート） ・年度末の次年度個別の指導計画作成時に流れ図を作ることができる。	・教務部と研究部は、協働・分担して自立活動の指導のPDCAサイクル（個別の指導計画の作成を含む）を構築する。 ・研究部は、自立活動の指導の専門性を高める研修を行う。（流れ図、Co-Mameなど） ・各学部は、自立活動の担当チームを組織し、担当チームは研究部と連携して題材や教材、指導方法、評価方法、学習形態を検討・実践する。研究部はチームの実践を全体で共有し・蓄積する。 ・学部主導は、自立活動担当チームの取組状況を把握し、検討・実践がしやすい環境をつくる。	C	・研究部が実施する自立活動の研修（流れ図作成等）を受け、教務部が、前期に作成した個別の指導計画の修正を行うスケジュールを示すことができたが、十分な研修時間等を確保できない現状もあり、取組に対する理解が深まっていない。 ・自立活動の指導計画の校内研修会（Co-MaMe.課題の関連図.指導計画の流れ図）を通じて、実態把握から計画・実践の一連の流れを理解することができるようになった。 ・学部研や校内研を通じて、教職員同士が学び合う機会が生まれチーム（組織的）で協議する場ができたが、自立活動の教材、指導方法、評価方法等の検討や実践の蓄積はできていない。 ・各学部とも、学部会や放課後の空き時間などを活用して、自立活動の取組状況などについて情報交換を行うことができている。	・Co-MaMeや流れ図の活用、個別の指導計画作成までの一連の流れについて、各教員の理解がより深まり実践力が高まるよう、全体研で段階的に研究協議を進め、２月に実践発表の場を設ける。 ・研修会を通して得られた知識を生かして、各クラスがチームで自立活動の指導実践に取り組み、個別の指導計画の的確な記載につなげる。 ・自立活動の指導内容や教材の蓄積のために、実践発表の場で学部を超えて取組内容を共有するとともに、流れ図などをデータ保存し共有する。 ・今後とも、学部会などで取組内容などの情報を共有するとともに、自立活動の質的改善に向けて課題などを確認し、解決策を検討していく。	B	・研究部が、前期末に作成した流れ図を活用して指導目標と内容の見直しを行ったが、流れ図による自立活動の目標設定が2学期からとなり、長期目標の本格的な設定が後期からとなってしまった。また、流れ図の効果的な使い方についての理解は一定進んでいるが、個別の指導計画に十分反映されていないといった課題が残っている。 ・研究部が、自立活動についての研修の機会を設けた。（5/31,6/28,7/27,28,,8/23,1/24） ・研究部作成の自立活動の流れ図(2023試案)を活用して後期の指導目標と指導内容を設定し実践した。 **・研究部による自立活動の研修会回数：6回** **・「自己評価シート（年度末実施）」において、自立活動の指導力向上に関する肯定的評価をした教員が増加** **※「自分で実践できる」「的確に実践できる」「助言できる」と回答した割合（合計）：57％（5月）⇒70％（12月）** ・各学部で、指導略案や教材の蓄積等を行い、学部毎の研修で、流れ図や実践の共有を行った。学部により、自立活動担当チームによる集団授業の取組が生徒個々の実態に合わないことがある。 【小】自立活動担当チームを中心に学部全員で意見を出し合って計画・実践・評価した。 【中】学部会等で自立活動の取り組みや課題等について共有することができた。 【高】各部署と連絡を取り合いながら予定を変更したため、その後は大幅に変更をする必要がなく、比較的スムーズに進めることができた。	B	・自立活動の学習での取組が、家庭などの生活場面で活かせるなどといった般化の視点を持ちながら授業づくりをすることが必要。 ・個別の指導計画の評価に、定量的なもの以外に、エピソードを集めて集積し、教員同士で共有するなど、質的な評価も必要。 ・学習指導要領には「子どもの強みを活かして」という記載がある。日本の伝統的な「苦手さを克服する」という教育ではなく、「弱みをどう強みでカバーできるか」という視点で、教員の視点を変革できないと、生徒が楽しさを感じることはできない。そのような教育観を先生方が共通認識できることが必要ではないか。	B	・児童生徒の自己理解の促進やキャリア実現のための学習が考慮された自立活動の学習内容を検討する。 ・流れ図作成における教員の課題（課題の背景要因の分析や目標に沿った自立の学習内容の考案など）に即した研修方法を検討する。
働き方改革	子どものことや授業づくりにやりがいをもち、協働的、合理的に取り組む職場づくり。	【現状】 △前例踏襲や形骸化によって必然性や合理性が不十分な業務がある。 △個業になりがちで助け合いが十分に機能せず、人的に業務の偏りがある。 △計画書・通知表の作成時期と行事等の立案・準備の時期が重なるなど時期的に業務の偏りがある。 ○支援金やケース会の実施回数が増え、児童生徒についてチームで考える機会が増えてきている。 ○会議資料のペーパーレス化や職員朝礼の掲示板利用で時間と労力の効率化ができた。 ○週3回18：15で退勤することが定着した。 【目標】 **★業務の平準化、効率化、削減と、会議の精選、職員室等の環境整備などによって、教職員間のディスカッションの機会確保と機動力をあげる。** 【評価指標】 ・前年度比較で、話し合いの機会が増加（学校評価アンケート） ・18：30までの退勤達成率100％	・各分掌部長・委員会実務担当は、会議や業務の年間の回数・サイクル・時期を見直して業務を分散化・平準化する。（年度初め・随時：R5年度の見直し、年度末：R6年度の見直し） ・各分掌部、各委員会、各学部は形骸化している業務の見直しと廃止を年度途中でも積極的に行う。 ・定例職員会議は4、8、1、2、3月に行う。 ・行事等担当者は、実施周知や直後の振り返りをGWで行いスピード感をもって効果的に改善を行う。 ・教務部はクラス会、教科等会を持ちやすい放課後の会議設定ルールを作り運営する。 ・管理職・事務職・DX推進部は、職員室等の執務環境整備、効果的な情報共有システム、効率的な書類作成手順を推進し、全教職員で取り組む。 ・月～金の最終退勤時刻を18：30とする。	B	・年度当初に、教務部が放課後の会議等の持ち方を示したことで、計画性のある効率的な運営ができるようになった。 ・各委員会の実務担当は、業務の分散化を念頭に役割分担を実施し、業務の平準化が進んでいる。 ・遠足や修学旅行の実施内容の変更（各学部、児童生徒部）、1日体験入学の廃止（相談支援部）、月例職員会の廃止（管理職）、振り返りシートの提出回数の削減など、形骸化している業務の見直しを進めている。 ・行事等の周知や、事後のアンケートなどはGWを活用して実施することが定着してきており、それらの結果を反映した改善を行うことができている。 ・年度当初に、教務部が放課後の会議等の持ち方（ルール）を示した。（再掲） ・職員室の座席等の配置改善に併せ、LANケーブルの刷新を実施した。また、DX推進部がデータ保存ファイルの規則性を示し、保管場所の整理を行ったことで、アクセサブルな環境が整った。 ・職員室内に、新たにテーブルを配置し共用スペースが整い、教職員が会話しやすい環境整備を行った。また公文書の紛失を防止するため専用の戸棚を設けた。 ・すべての職員が、最終退勤時刻を守ることが定着してきている。	B	・公開授業（2学期）を実施するにあたり、各授業の研究協議を行う時間が確保しづらい状態になっており、全体研や教材研究の日を活用して研究協議の時間を確保する。 ・引き続き、年度途中にも、随時、形骸化している業務の見直しを行う。 ・引き続き、GWの活用を促進するとともに、アンケート結果などはGW等でフィードバックしていく。 ・引き続き、示されたルールを運用していくとともに、次年度に向けた改善策について関係部署で協議する。 ・金庫や個人情報保護のロッカーに保管する必要がある資料を精選し、すべての教職員がわかりやすい環境を整える。 ・フォルダ内に保存するファイル名の命名方法が定着していないため、再度、周知する。 ・一部、退勤時間間近に帰宅準備をする教員がいるので、早めの準備を促す。	A	・教務部が年度当初に示した年間スケジュール等を活用し、事前に準備することが比較的容易になり、効果的な運営ができた。しかし、年度当初の計画で予定されていない研修や協議等が入り、予定外の日に研修が入ることがあった。 ・公開授業の研究協議は、年間計画の行事予定を組み替えることで対応することができた。 ・中間評価時までの業務の見直しに加え、次年度に向けて、校時表の見直し、出席簿のデータ化、中高の45分授業の廃止など、関係者に意見を聞きながら形骸化している業務の見直しを行うことができた。 ・職員会議の開催回数を減らし、可能な限りGWや学部会で情報共有を行ったが、情報が伝わっていない（認識されていない）状況が見受けられた。 ・行事等の振り返りをGWで行うことが定着してきており、アンケートへの回答などが円滑に行えるようになってきた。 ・年度当初に、教務部が示した放課後の会議等の持ち方（ルール）により円滑な運営ができた。また、行事予定の追加や変更については、教務部への事前連絡が、ほぼ定着してきたことで予定の重複などがほぼ解消された。 ・公文書を一括保管するための専用キャビネットの設置、プリンターの新設等を行い、職員室の環境整備を行った。また、書籍コーナーを設け、個人が所有する専門性向上のための書籍を共有するなど学びやすい環境を整えた。 ・最終退勤時間は、ほぼ、全ての教員が守れるようになった。 **・前年度比較で、教職員の話し合いの機会の増加（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教職員の割合：90％（33/37）** **・「退勤時間を守った（学校評価アンケート）」に肯定的な回答をした教職員の割合：92％（35/38）**	A	・総合的な学習（探究）の時間の取組では、自己理解や他者理解が深まった生徒がいたという点が評価できる。そのような児童生徒が少しずつ増えていくことは良いことだ思う。 ・総合的な学習（探究）の時間の取組が、体験的な活動と関連付けられている。また、小学部から高等部までの全校児童生徒が、縦割りで学ぶという学習形態も、とてもユニーク。発達段階が異なる子どもたちだが、一緒に学ぶ、児童生徒数が少人数だからこそできる取組と思う。年間を通じて、行事も沢山行われており、江の口の特色として打ち出せる取組になっている。 ・キャリア教育の取組が、音楽、食、社会参画など多岐にわたっており、生活が豊かになるような取組が沢山あることは評価できる。また、学校のホームページやすぐーるなどで情報発信されていることはとてもいい。 ・キャリア教育は、不登校対策とも重なる取組。「個別最適」と「協働的な学び」とのバランスが取れている（小規模校の強み）。 ・異年齢集団は、同年齢よりも関係性を作りやすくなるということも明らかになっており、総合的な学習（探究）の時間に縦割りの学習形態を取り入れているのは良い。江の口の強みになる。	・校時表の見直し、放課後の会や研修の入れ方など、放課後に活用出来る時間について検討を行う。 ・引き続き、業務の見直しを行うなど、スクラップ＆ビルドを行う。 **・学校運営協議会に参画いただいている委員の方々の所属団体等と連携した取組を検討していく。**